

自閉スペクトラム症傾向が高い成人における職場不適応感 メンタライゼーション・二分法的思考に焦点化して

板坂美波（東京大学大学院教育学研究科）

Workplace maladjustment in adults with high autistic traits
Focus on mentalization/dichotomous thinking

Minami Itasaka

Author's Note

Minami Itasaka is a PhD student, Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Abstract

The present study examined how interpersonal maladaptive feelings in the workplace occur in adults with high ASD tendencies in terms of mentalization and dichotomous thinking. The results of the mediation analysis indicated that the indirect effects of mentalization and dichotomous thinking were not significant. There was a significant positive association between mentalization of others and dichotomous thinking, and a significant negative association between mentalization of self and dichotomous thinking. These results suggest that the association between dichotomous thinking and feelings of workplace maladjustment is low; however, there may be a discrepancy between subjective and objective adjustment, and this relationship should be reexamined using more objective measures in future research. Furthermore, the correlation between ASD tendency and dichotomous thinking in the present study was very small, which also differed from expectations. Although previous studies have described dichotomous thinking in individuals with ASD, it is possible that dichotomous thinking is a secondary disorder rather than a feature of ASD, and since most studies examining the relationship between ASD proneness and dichotomous thinking have not controlled for the presence of secondary disorders, the strength of dichotomous thinking may vary across the samples obtained. Future studies should control for the presence of secondary disabilities.

Keywords: workplace maladjustment, autistic traits, mentalization, dichotomous thinking

キーワード：職場不適応，自閉スペクトラム症傾向，メンタライゼーション，二分法的思考

自閉スペクトラム症傾向が高い成人における職場不適応感 メンタライゼーション・二分法的思考に焦点化して

1 問題と目的

自閉スペクトラム症 (ASD: Autism Spectrum Disorder) とは、持続する相互的な社会的コミュニケーションや対人的相互反応の障害、及び限定された反復的な行動、興味、または活動の様式という二つの主要な特徴からなる神経発達症である (金生・渡辺・土橋, 2016)。DSM-IV では広汎性発達障害という上位概念のもとに、自閉症、アスペルガー障害、特定不能の広汎性発達障害などの下位分類が存在したが、DSM-5 では ASD という概念で統一された (傳田, 2017)。

ASD は、職場不適応のハイリスク要因として認識されるようになっており (堤, 2016)、発達障害者のなかで、就労上の課題が最も多いとされるのが ASD 者であるとされている。仕事上の能力を有していても、対人関係の困難さなどによって離職する人が多く、ASD 者の就労上の最も大きな課題は対人関係であることが明らかにされている (梅永, 2017)。

適応という言葉は、客観的指標に表れる客観的適応を示しており、適応感という言葉は、本人が「うまく適応している」と感じているかという主観的適応を示している (半澤, 2014)。本研究では、本人がどう感じているかがメンタル不調や離職に関連していると考えられるため、適応感という言葉を用い、対人関係の困難さという観点から ASD 者の職場不適応感がどう生じるのか考える。

ASD 者の対人相互作用とコミュニケーションの諸困難は「メンタライジング」に関する困難の現れとしばしば規定される (Fletcher-

Watson & Happé, 2019 石坂他 訳 2023)。メンタライゼーションとは、自分や他者のこころの状態に思いを馳せること、及び自分や他者のとる行動をその人のこころの状態と関連づけて考えることと定義される概念であり (池田, 2021)、対人関係における自分や他者の行動を支える精神状態 (信念、動機、感情、欲求、ニーズなど) を想像することによって人間が社会世界を理解する方法を説明するものと捉えられている (Choi-Kain & Gunderson et al., 2008)。メンタライゼーションは、「共感」による他者に対する理解プロセスと、「内省」による自己に対する理解プロセス、それらを動機づけるメンタライゼーションへの関心という中核的概念によって特徴づけられ、他者に対するメンタライジング、自己に対するメンタライジング、メンタライゼーションへの関心という三つの下位尺度からなる。ASD 傾向との関連については、ASD 傾向とメンタライゼーションとの負の相関、及びメンタライゼーションの下位尺度のうち他者に対するメンタライジングとの負の相関が示されている (松葉他, 2022)。

メンタライゼーションが弱いと、対人関係上の葛藤を解決するのが難しいため (池田, 2021)、職場不適応感が生じる可能性がある。したがって、ASD 者は、メンタライゼーションの弱さによって他者の心的状態を読むことが難しいため、職場不適応感につながっていると考えられる。

このように、メンタライゼーションの弱さと職場不適応感が関連していると考えられるが、その関連を、二分法的思考が媒介しているので

はないかと考えられる。二分法的思考によって極端な判断をすることで、職場不適応感が強まる可能性がある。

二分法的思考とは、「白か黒か」「善か悪か」「0か100か」というように、物事を二律背反的なものとして考える傾向（Oshio, 2009）のことである。ASD 者は他者の心的状態の理解が不得意であることによって、言葉や行動などの外的なものから安直に相手の心的状態を推測してしまうのではないかと考えられ、それによって、他者の言動から他者に関する極端な判断をしてしまうのではないかと考えられる。例えば、他者の表面的に厳しい発言に対して、他者の真意が読めないことによって他者に嫌われていると感じたり、その他者を悪い人だと感じたりするなど、極端に否定的な判断をしてしまう可能性がある。

ASD と二分法的思考についての理論的研究・量的研究は限られているが、量的研究では、ASD と二分法的思考の関連は「不確実性への耐性の低さ」が媒介していることが示されている（Suzuki & Hirai, 2023）。質的研究では、二分法的思考を直接扱った研究ではないが、ASD 者に認知行動療法を行ったセラピストへのインタビュー調査において、対象となったセラピストのうちの 40%が、ASD 者の硬直性・二分法的思考が治療の障壁になっていると述べている（Cooper et al., 2018）。

二分法的思考は、他者への評価及び他者からの評価への推測における否定的な判断へとつながり、それによって、職場不適応感が生じると考えられる。具体的には、他者への評価については、二分法的思考は他者軽視傾向と正の相関がある（Oshio, 2009）ため、二分法的思考が他者に対して否定的な評価をしやすい傾向に関連

することが示唆されることや、二分法的な思考態度をとることは他者のごく一部の特徴が全体的な印象形成や他者評価に結びつくことを高める可能性があると考えられることから（小塩, 2009）、二分法的思考によって、相手の少しの嫌な行動をその人全体の悪い評価に結びつけてしまいやすく、他者に嫌悪感を強く持ちやすくなり、他者に対して回避行動を取ることで孤立につながるのではないかと考えられる。他者からの評価への推測については、二分法的思考は否定的完璧主義を予測する（Egan et al., 2007）ため、他者からの少しの批判や注意によって深く傷ついてしまう可能性があることや、二分法的思考によって、完全に好かれている、認められているのではない場合は、完全に嫌われている、使えない人間だと思われていると思ってしまう可能性があるため、孤立感を感じたり、回避行動を取ることで実際に孤立したりするのではないかと考えられる。

したがって、ASD 者は、他者の心的状態を理解することが難しいことで、他者の言動から他者に関する判断に安直に結びつけてしまう可能性があり、それによって、他者への評価や、他者からの評価への推測が極端なものとなり、孤立感や孤立につながる可能性がある。すなわち、ASD 者は、メンタライゼーションが弱いことによって、二分法的思考が強まり、職場不適応感が強まっていると考えられる。

ここまで ASD 者の職場不適応感について述べてきたが、診断を受けた ASD 者に限らず、診断を受けていないが ASD 傾向が高い成人も、職場不適応感を持っていると考えられることや、障害者雇用枠で働く ASD 者に限らず、一般の雇用枠で働く ASD 傾向の高い成人のことも対象にする必要があると考えられることから、

本研究では、診断の有無ではなく、ASD 傾向を測定する。

本研究の目的は、ASD 傾向が高い成人の職場の対人関係における不適応感がどのように起きているのかをメンタライゼーション・二分法的思考の観点から明らかにすることである。具体的には媒介分析を用いて以下のモデルを検証する (Figure 1)。ASD 傾向が高いほど、メンタライゼーションが弱くなり、二分法的思考が強くなることで、職場不適応感が生じやすいと考えられる。

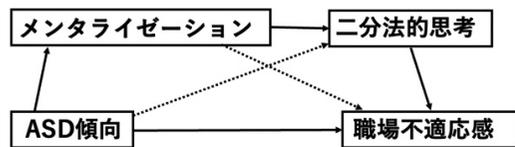


Figure 1. 本研究で予想されるモデル

2 方法

2.1 研究参加者

研究参加者は、クラウドソーシングサービスであるクラウドワークスを用いて募集された400名である。募集の際には、18歳以上で、仕事（フリーランスを除く）をしていて、週1日以上出勤（テレワークではなく、職場で勤務）をしていることを主要な参加条件として示した。このうち、回答に問題のあったデータを除外し、367名のデータを分析に用いた（女性188名、男性175名、回答しない4名、 $M_{age} = 40.42$, $SD_{age} = 9.11$ ）。

職種は、営業が21名、事務・管理が117名、企画・マーケティングが12名、経営・管理職が8名、サービスが75名、専門職（コンサルタント等）が21名、技術職が64名、公務員が6名、その他が43名であった。

2.2 質問紙

AQ 日本語版 ASD 傾向を測定する尺度として AQ 日本語版を用いた (若林ら, 2004)。社会的スキル、注意の切り替え、細部への注意、コミュニケーション、想像力の5つの下位尺度からなる50項目の尺度である。「あてはまる」から「あてはまらない」までの4件法で尋ね、各項目の自閉症傾向を示すとされる側に「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」(逆転項目では「あてはまらない」または「どちらかといえばあてはまらない」という回答に1点を与えた。

二分法的思考尺度 二分法的思考を測定する尺度として二分法的思考尺度を用いた (Oshio, 2009)。二分法の選好、二分法的信念、損得思考の三つの下位尺度からなる15項目の尺度である。「全くあてはまらない」から「非常によく当てはまる」までの6件法で尋ねた。

日本語版メンタライゼーション尺度 メンタライゼーションを測定する尺度として日本語版メンタライゼーション尺度を用いた (松葉ら, 2022)。自己に対するメンタライジング、他者に対するメンタライジング、メンタライゼーションへの関心の三つの下位尺度からなる18項目の尺度である。「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの5件法で尋ねた。

職場適応感尺度 職場適応感を測定する尺度として職場適応感尺度を用いた (野田・奇, 2016)。良好な人間関係、課題・目的の存在、被信頼感・受容感、劣等感のなさ、職場安心感の5つの下位尺度からなる30項目の尺度である。本研究では職場における対人関係に焦点を当てているため、課題・目的の存在を除く23項目で測定した。「全くあてはまらない」から「非常に

よくあてはまる」までの 5 件法で尋ねた。

日本版主観的幸福感尺度 主観的幸福感を測定する尺度として日本版主観的幸福感尺度を用いた (島井・大竹・宇津木・池見, 2004)。4 項目からなる尺度であり, 回答は 7 件法で尋ねた。

2.3 分析方法

本研究の分析は, R の lavaan パッケージを用いた媒介分析を行った。

3 結果と考察

まず, ASD 傾向, メンタライゼーション, 二分法的思考, 職場適応感, 主観的幸福感の最小値, 最大値, 平均, 標準偏差, 及び信頼性係数 α を以下の Table 1 で示す。それぞれの尺度得点は全項目の平均得点を採用した。次に, メンタライゼーションの下位尺度 (自己に対するメンタライジング, 他者に対するメンタライジング, メンタライゼーションへの関心) を含めた,

変数間の相関分析の結果を Table 2 で示す。想定と異なり, ASD 傾向と二分法的思考, 及び二分法的思考と職場不適応感の相関が有意ではなかった。

独立変数を ASD 傾向, 媒介変数 1 をメンタライゼーション, 媒介変数 2 を二分法的思考, 従属変数を職場不適応感とした媒介分析 (Figure 2) を行った。その結果, ASD 傾向とメンタライゼーション, メンタライゼーションと職場適応感, ASD 傾向と職場適応感は無意に関連した。メンタライゼーション, 二分法的思考の間接効果をブートストラップ法で算出したところ, 間接効果は無意にならなかった ($p <$

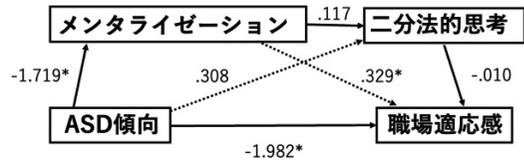


Figure 2. 仮説の結果

Table 1. 各尺度の要約統計量

尺度	有効N	最小値	最大値	平均	標準偏差	信頼性係数
ASD	367	0.08	0.8	0.44	0.15	0.83
メンタライゼーション	367	2	4.83	3.39	0.46	0.78
二分法的思考	367	1.13	6	3.4	0.84	0.92
職場適応感	367	1.04	5	3.32	0.73	0.95
主観的幸福感	367	1	7	4.24	1.29	0.89

Table 2. 相関分析の結果

	1	2	3	4	5	6	7
1.ASD	—						
2.メンタライゼーション	-.57*	—					
3.職場適応感	-.53*	.45*	—				
4.二分法的思考	.03	.03	-.02	—			
5.主観的幸福感	-.44*	.28*	.51*	-.10*	—		
6.他者メンタライゼーション	-.45*	.74*	.32*	.17*	.19*	—	
7.自己メンタライゼーション	-.49	.72*	.37*	-.12*	.23*	.22*	—
8.関心メンタライゼーション	-.22	.67*	.25*	.04	.16*	.38*	.18*

* $p < .05$

.05)。

本研究では、ASD 傾向の高い成人の他者に對するメンタライジング（以下他者メンタライゼーションとする）の弱さが二分法的思考を強めることによって職場不適応感につながることを想定しているため、追加分析として、媒介変数 1 を他者メンタライゼーションに絞った媒介分析（Figure 3）を行った。その結果、ASD 傾向と他者メンタライゼーション、ASD 傾向と職場適応感、ASD 傾向と二分法的思考、他者メンタライゼーションと二分法的思考は有意に関連した。他者メンタライゼーション、二分法的思考の間接効果をブートストラップ法で算出したところ、間接効果は有意にならなかった ($p < .05$)。他者メンタライゼーションと二分法的思考は正の関連を示した点も、本研究の想定と異なっていた。他者メンタライゼーションが自己報告式で測定されており、自分が他者の心的状態を理解できているかどうかについて回答する項目から構成されているため、実際に他者の心的状態を正確に理解できているかどうかについては測定できていない可能性がある。ASD と二分法的思考の関連は「不確実性への耐性の低さ」が媒介していることが示されている (Suzuki & Hirai, 2023) が、「不確実性への耐性の低さ」によって、他者の心的状態という不確実なものを、理解できていると主観的に思いやすくなっている可能性もある。すなわち、ASD 傾向の高い成人の「不確実性への耐性の低さ」が、主観的な他者メンタライゼーションと二分法的思考の両方に影響を与えていることで、他者メンタライゼーションと二分法的思考が正の関連を示していると考えられる。

探索的に、メンタライゼーションのその他の下位尺度を媒介変数 1 にした媒介分析を行っ

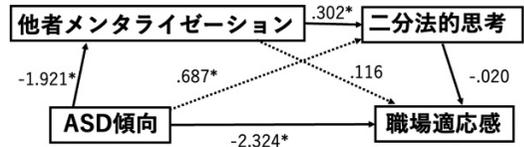


Figure 3. 媒介変数 1 を他者メンタライゼーションに絞った媒介分析の結果

た。自己メンタライゼーションを媒介変数 1 にして媒介分析（Figure 4）を行った結果、ASD 傾向と自己メンタライゼーション、自己メンタライゼーションと二分法的思考、ASD 傾向と職場適応感、自己メンタライゼーションと職場適応感は無意に関連した。自己メンタライゼーション、二分法的思考の間接効果をブートストラップ法で算出したところ、間接効果は無意にならなかった ($p < .05$)。自己メンタライゼーションと二分法的思考に負の関連が示されたため、自己メンタライゼーションが低いほど、二分法的思考が強まることが示唆された。自己の心的状態を正確に把握できないことによって、例えば、「とても好き」でも「とても嫌いでもない」というような中間の状態を認識できず、0 か 100 かの極端な心的状態として認識してしまうと考えられる。

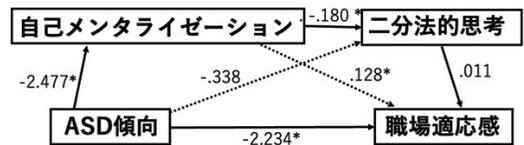


Figure 4. 媒介変数 1 を自己メンタライゼーションに絞った媒介分析の結果

関心メンタライゼーションを媒介変数 1 にして媒介分析（Figure 5）を行った結果、ASD 傾向と関心メンタライゼーション、関心メンタライゼーションと職場適応感、ASD 傾向と職場適

応感は有意に関連した。関心メンタライゼーション、二分法的思考の間接効果をブートストラップ法で算出したところ、間接効果は有意にならなかった ($p < .05$)。

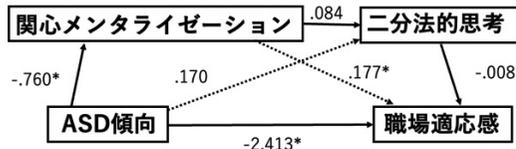


Figure 5. 媒介変数 1 を関心メンタライゼーションに絞った媒介分析の結果

仮説及びその追加分析の結果、二分法的思考から職場適応感への係数が特に小さく、二分法的思考と職場不適応感との関連が低い可能性が示唆された。本研究では、二分法的思考によって極端に否定的な判断をしてしまうことを想定していたが、極端に肯定的な判断をする場合もあるということや、二分法的思考によって嫌いな人とは関わらないというような割り切った対人関係をしていて、客観的には問題が生じていたとしても主観的には適応感を持っている可能性もあるということが考えられる。

4 総合考察

本研究では、ASD 傾向が高い成人の職場の対人関係における不適応感がどのように起きているのかをメンタライゼーション・二分法的思考の観点から検討した。媒介分析の結果、メンタライゼーションと二分法的思考の間接効果は有意にならなかったが、他者に対するメンタライジングと二分法的思考との間に有意な正の関連、及び自己に対するメンタライジングと二分法的思考との間に有意な負の関連が示された。

本研究の限界として、ASD 傾向の高い成人に関する研究にもかかわらず、自己報告式の尺度

のみを用いている点が挙げられる。ASD 者の中には自己の状態を客観的に認識できないほか、言語理解や言語表現に課題を有する者も認められる。臨床現場で ASD のスクリーニングに AQ を用いると、ASD と診断された者でも、AQ 上は ASD と判定されない場合があり、これは本人の自己理解が正確でない可能性を示唆している (西藤ら, 2018)。特に本研究で用いた他者に対するメンタライジングについての項目は、自分が他者の感情を正確に理解できているかについて自ら評価する内容であり、特に ASD 傾向が高いと、客観的な回答が難しいと考えられる。本研究では他者に対するメンタライジングと二分法的思考との間に有意な正の関連が示されたが、今後、より妥当な方法を用いたうえで再検討する必要がある。

本研究の想定とは異なり、二分法的思考と職場適応感との関連が低い可能性が示されたことについても、職場適応に関して職場適応感という主観的な指標を用いたことが関連していると考えられる。今後は、より客観的な指標を用いることや、適応しているか否かではなく、職場でどのような対人関係を構築しているのかについても検討していく必要があるだろう。加えて、本研究では、二分法的思考によって極端に否定的な判断をしてしまうことを想定していたが、極端に肯定的な判断をする場合もあるため、今後はネガティビティ・バイアスなどの調整変数を含めた分析を行い、再検討していく必要がある。

さらに本研究では ASD 傾向と二分法的思考との相関が非常に小さく、その点も想定とは異なっていた。先行研究では、ASD 者の二分法的思考について記述されていたが (Cooper et al., 2018)、二分法的思考は ASD の特徴というより

も、二次障害として生じているものである可能性もあり、ASD 傾向と二分法的思考との関連について検討した研究の多くは二次障害の有無が統制されていないため、得られたサンプルによって二分法的思考の強さが異なるのかもしれない。今後は二次障害の有無を統制した上で再検討する必要がある。

以上のような限界があるものの、本研究ではメンタライジングと二分法的思考との関連について、今後の研究の端緒となる結果が得られた。今後は、その他の要因も含め、ASD 傾向の高い成人がなぜ職場で不適応感を感じているのかを総合的に検討する必要がある。

参考文献

- Choi-Kain, L. W., & Gunderson, J. G. (2008). Mentalization: Ontogeny, assessment, and application in the treatment of borderline personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, 65(9), 1127-1135.
- Cooper, K., Loades, M. E., & Russell, A. J. (2018). Adapting Psychological Therapies for Autism – Therapist Experience, Skills and Confidence. *Research in autism spectrum disorders*, 45, 43-50.
- 傳田健三 (2017). 自閉スペクトラム症 (ASD) の特性理解 心身医学, 57(1), 19-26.
- Egan, S. J., Piek, J. P., Dyck, M. J., & Rees, C. S. (2007). The role of dichotomous thinking and rigidity in perfectionism. *Behaviour research and therapy*, 45(8), 1813-1822.
- Fletcher-Watson, S. & Happé, F. (2019). *Autism A New Introduction to Psychological Theory and Current Debate (2ed)* Routledge. (石坂好樹・宮城崇史・中西祐斗・稲葉啓通 (訳) (2023). 自閉症——心理学理論と最近の研究成果—— 星和書店)
- 半澤礼之 (2014). 大学生の適応を捉えるために一大隅・小塩・小倉・渡邊・大崎・平石論文へのコメント— 青年心理学研究, 25(2), 176-180.
- 池田暁史 (2021). *メンタライゼーションを学ぼう* 日本評論社
- 金生由紀子・渡辺慶一郎・土橋圭子 (2016). 新版 自閉スペクトラム症の医療・療育・教育 金芳堂
- 松葉百合香・リー スティーブケイ・原口幸・岩崎美奈子・大月友・桂川泰典 (2022). 日本語版メンタライゼーション尺度 (The Japanese version of Mentalization Scale: J-MentS) の開発と信頼性, 妥当性の検討 発達心理学研究, 33(3), 137-145.
- 野田垂衣子・奇恵英 (2016). 若手社員の職場適応感の理解とその心理学的援助に関する研究 福岡女学院大学大学院紀要, 13, 63-71.
- Oshio, A. (2009). Development and validation of the Dichotomous Thinking Inventory. *Social Behavior and Personality: An International Journal*, 37(6), 729-742.
- 小塩真司 (2009). 二分法思考を行う者の他者評価: 容姿に注目して 日本パーソナリティ心理学会 (岡山県).
- 西藤奈菜子・川端康雄・寺嶋繁典・米田博 (2018). 心理検査を用いた青年・成人の軽度自閉スペクトラム症 (ASD) のスクリーニングについて 関西大学臨床心理専門職大学院紀要, 8, 31-40.
- 島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・池見陽・LYUBOMIRSKY Sonja (2004). 日本版主

観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale: SHS) の信頼性と妥当性の検討 日本公衆衛生雑誌, 51(10), 845-853.

Suzuki, N., & Hirai, M. (2023). Autistic traits associated with dichotomic thinking mediated by intolerance of uncertainty. *Scientific reports*, 13(1), 14049.

堤明純 (2016). 職場におけるメンタルヘルス不調のスクリーニング 総合健診, 43(2), 313-319.

梅永雄二 (2017). 発達障害者の就労上の困難性と具体的対策: ASD 者を中心に 日本労働研究雑誌, 59(8), 57-68.

若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S・Wheelwright, S (2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討— 心理学研究, 75(1), 78-84.